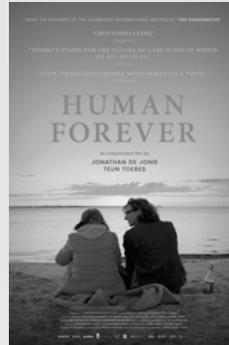


『ヒューマン・フォーエバー』

監督・脚本：ヨナタン・デ・ヨング

2023年／オランダ／83分



配信サイト

アジアンドキュメンタリーズで配信

社会を旅する シネマ

きっともっと 近くなる
きっともっと 知りたくなる

「自由と独立を謳歌したあとに、孤独が広がる場所に軟禁されたいか」。将来認知症になって介護施設で死ぬことを考えると絶望的な気持ちになると語る、弱冠24歳の本作主演者トゥーン。どうしたら認知症の人たちの生活の質を高めることができるのか。この問いへの答えを探すため、介護施設に数年入居して暮らしてきた。そして次なる探求として、4大陸11カ国を巡り、各地で認知症と向き合う人たちの声を聞いていくことに。

南アフリカでは認知症という疾患自体の理解がまだ進んでいない。認知症の症状である独り言は土着の信仰で「魔女の証」とされ、若者に高齢女性が焼き殺されてしまう事件も起きている。欧州最貧国のモルドバでは、若年層が国外へ出稼ぎに出てしまい、政府の支援も乏しい中、高齢者の孤立化が進んでいる。はたまた、2044年に高齢化率が世界最高になると言われる韓国は、認知障害の早期発見と予防に尽力している。それぞれに実情は異なりながらも、あらゆる国に認知症と生きる人たちがいるのを目の当たりにすると「認知症は肌の色、性別、年齢を差別しない。築いてきた人物像や功績も無関係」という監督の言葉のとおりだと感じる。

一方、欧州を中心に、介護の現場では今、自由や独立といった概念への意識が高まりつつある。

従来の介護施設では入居者は「何もできない人」になりやすい。できあがった料理が配膳されるのを待つだけ。お風呂もトイレも何をするにも手助けし

認知症介護の現場から 尊厳を守ることの重要性を学ぶ

アーヤ藍

てもらう。1日のスケジュールも施設で決められたものに沿う。しかし本作には、介護機器をすべて取り除いているという施設や、料理から食器の片付けまですべて入居者がやるという施設も登場する。一見、介護施設だとは思えないほど、皆、はつらつとしている。「あれは危ない」「これは難しいだろう」と安全を優先して役割を奪ってしまうことが、実は「人間らしさ」をも奪い、かえって相手を弱者としてしまっているのかもしれないと気づかされる。

別の施設では空間全体が見えやすい設計に変えたことで落ち着きや安心感が生まれ、徘徊する入居者がいなくなったという声もあったり、精神疾患薬の投与をやめたら、認知症の症状だと思われている臆腫とした感じや眠り込んだ状態がなくなったという話も出てくる。障害者と書くときの「障害」は当事者ではなく社会の側に存在する、とよく言われるが、同様に、認知症の問題行動の原因が当事者の外側にあった事例だ。

2025年には日本の65歳以上の5人に1人が認知症になると言われる。今の高齢者の人たちの尊厳を尊重することは、未来の自分の尊厳を守ることになるだろう。また、本作はたとえ言葉でのコミュニケーションに難があったとしても、ひとりの意志や尊厳を尊重することができると教えてくれる。そこから学び、応用できる場所は、介護現場に限らず数多くあるはずだ。



アーヤあい：映画探検家。慶應大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことが契機で、社会問題にかかわる映画の配給宣伝を行うユナイテッドピープル(株)に入社。取締役副社長も務める。現在は独立して映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。編著書に『世界を配給する人びと』(春眠舎)。

